



なんで
いろいろうまく
いかないのかなあ？

運が悪い
だけなんだろうか？

「けっこう頑張っているのにどうしてうまくいかないんだろう？」って考えたことありませんか？また、人によって、運がいい、とか、悪いも、確かにありますよね？そういったことに、実は「宗教」が関係しているって知っていましたか？

「宗教」なんて、ただの精神修養か、気休め、怪し気な祈禱や占い、あるいは結婚式や葬式の時だけのもの、だから「宗教は私達の生活にあまり関係がない」と思っている人達がほとんどでしょう。でも、これは大きな誤りで、実は宗教は人生すべてにわたって大きく影響しているのです。

「一言ええ」「そんな馬鹿なことがあるか！」「自分は宗教に興味がないから関係ない」

「自分は既に信仰をしているから、これ以上聞く必要はない」とか……いろいろ思われるでしょう？でも

「経験がないから」「自分の知識では理解できない」「ただ嫌い！」「興味がない」からといって、幸せ・不幸せに深い関係があることを頭から否定したり、無視したりすれば、たいへんな損をするかもしれません。

賞味期限とか？

みなさんは、なにか信仰していますか？おそらくほとんどの方は特には信仰してはいらっしゃらないでしょう。でも無宗教とはいっても、どの宗教とも全く無縁という人はいないですよ。

「宗教」なんて、ただの精神修養か、気休め、怪し気な祈禱や占い、あるいは結婚式や葬式の時だけのもの、だから「宗教は私達の生活にあまり関係がない」と思っている人達がほとんどでしょう。でも、これは大きな誤りで、実は宗教は人生すべてにわたって大きく影響しているのです。

人生を大きく左右

宗教の成分とは、●本尊 ●教義 ●修行法 でしょう。

例えばダイオキシシンや環境ホルモンのような毒物が飲食物に入っていると、毎日の飲食では気がつかなくとも長い間には取り返しのつかない病気になるってしまいます。宗教も同じで、本尊や教義、修行法に不純物や毒物が入っていると、日々の生活では気がつかないうちにだんだんと「毒」が回ってきて、いつのまにか、仕事がない/借金だらけ/病氣/事故/けが/家庭不和/精神的な病/対人関係の悩み等など不幸な現象が多い生活となってしまうのです。

また、さきほどの毒が入っている飲食物でも毎回の食事の時には、おいしさや、満腹感といった快感はあるのと同様に、宗教でも「少し病氣が良くなった」「金回りが良くなった」●「精神的に楽になった」など、一時的には「御利益が出た！」と思える事は実際にあるので、まさかその宗教に猛毒があるとは思えない

不幸の原因？

このように宗教の影響は人生の幸・不幸を大きく左右していますから、「自分には関係ない」とか「信心は何でもいい」というわけにはいかないのです。

「宗教の害毒」は命の奥深いところへ染み込みますから、さまざまな不幸の根本原因となっています。今、みなさんがなにかしらの不幸や不運を感じているとすれば、その一番元には、全く意識はできませんが「誤った宗教による害毒」があるのです。

不幸を好む人は誰もいません。今からもっと幸せになりたいと誰しも願っています。幸福になるためには今まで溜めてきた「宗教の害毒」を洗い流さなくてはなりません。この害毒は不純物や毒気の全く無い清浄な「真実最高の宗教」によってしか洗い流せないのです。

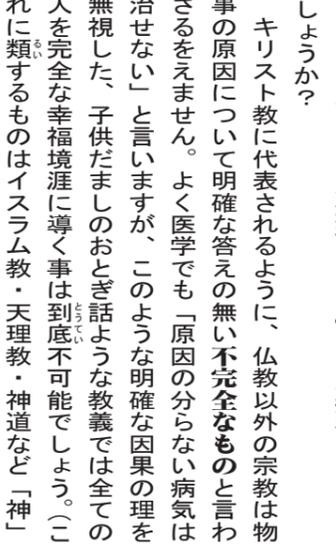
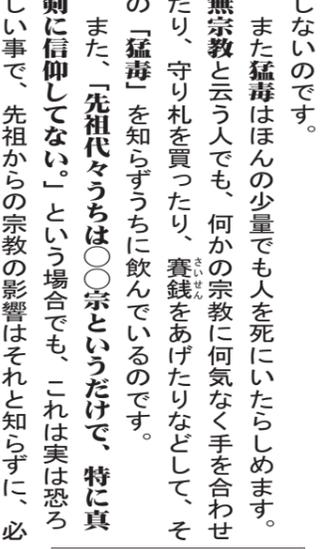
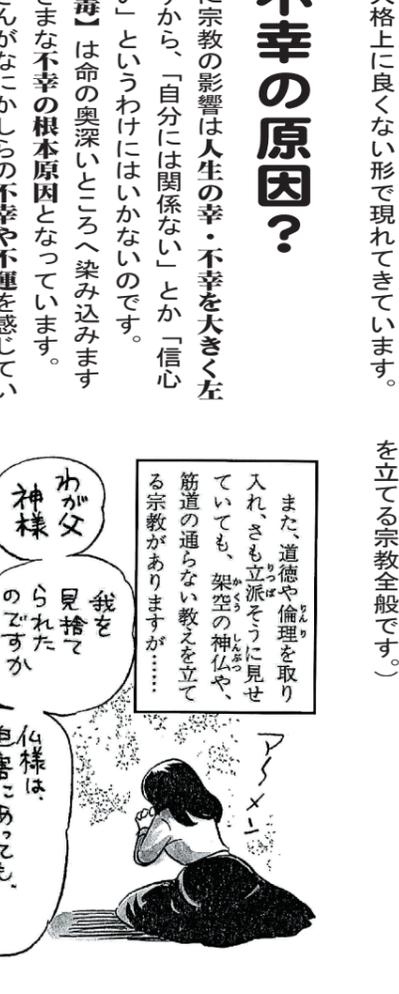
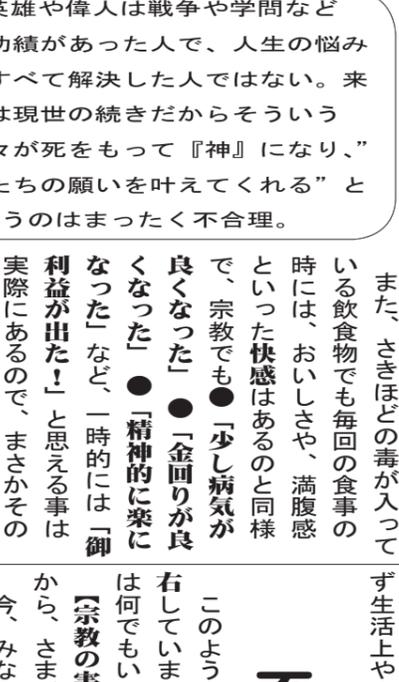
キリスト教は？

世の中には実にさまざまな宗教が存在しておりますが、まずこれらを「因果」(原因と結果の関係)をきちんととらえているかどうかを基準に比較対照してみると大きく仏教と他教以外の教えとに分けられます。

仏教では「因果」を根本としておりますが、他教以外の教えでは因果が明らかでなかったり、因果を無視し否定しています。この世の全ての事象の原因が明確になっていない教えでは私達を導くことは無理でしょう。

たとえばキリスト教では「神」の存在から全てが始まりますが、ではその神は何を原因として生じたのか？何も明かされていません。また、イエス・キリストは処女マリアが身籠った(?!?)とされていますが、果たしてこんなことが道理としてみなさん納得できるのでしょうか？

キリスト教に代表されるように、他教以外の宗教は物事の原因について明確な答えの無い不完全なものと言わざるを得ません。よく医学でも「原因の分からない病氣は治せない」と言いますが、このような明確な因果の理を無視した、子供だましのおとぎ話のような教義では全ての人を完全な幸福境界に導く事は到底不可能でしょう。(これに類するものはイスラム教・天理教・神道など「神」を立てる宗教全般です。)



仏教では？

みなさんは「仏教であれば同じお釈迦様の教えだ」と思っているようですが実はそうではないのです。お釈迦様は三十歳で悟りを得てから亡くなるまでの五十年間に膨大な教えを説いてますが、その四十二年目に説いた「無量義経」という教典の中で「これまでの四十年にある年月においては未だ真理の全て、核心を説き願わしていないのである」と述べています。そして、この無量義経に説かれた有名な「法華経（妙法蓮華経）」の中に

末法って？

●「今こそまさにこれまでの方便の教え（仮の教え）を捨てて最高真理の教えを説く」とお釈迦様が自ら「法華経こそ最高真理の教えである」と述べているのです。

「釈尊が亡くなって後、およそ二千年が過ぎると、末法」といつて人の心が非常に濁って泥沼のような時代が訪れる。その時は仏教も分裂・混乱し、世の中にも争いが相次いで釈尊の遺した仏法が民衆を救済する力を失ってしまふ。」と説かれているのです。

これが「末法」という時代です。現代はもちろん末法時代です。ですから今はお釈迦様が説いた全ての仏教の功德力は失われ民衆を救う力は全く無いとお釈迦様自身が預言しているのです。それだけでなく末法にお釈迦様の仏教を信仰すると、例えば「二週間前に炊いた飯を今食べるようなもの（一時の満腹感だけはあがるが、必ず腹をこわす）」とか「去年のカレンダーを今年使うようなもの（生活が大混乱する）」とまで言われているのです。事実、紙札を家中に貼り、禪宗や真言宗、浄土宗や浄土真宗等の檀家総代等先祖代々熱心に続けてきたような家ほど、不慮の災難、病氣、自殺、家庭不和、身体障害などの深刻な苦悩に喘いでいます。どうしてでしょうか？

日蓮大聖人の仏法

日蓮大聖人は、貞応元年（一一二二）二月十六日安房国（千葉県）に御誕生になり、建長五年（一一五三）四月二十八日に、末法の眞の法華経である大仏法の南無妙法蓮華経の宗旨を建立されました。

その後大聖人は、命に及ぶほどの大難や二度の流罪など多くの法難（迫害）に遇いながらも、南無妙法蓮華経を弘め、弘安二年（一一七九）十月十二日、私たち末法



つきの業病（医者で治せない病氣）すら克服できる。いわんやそれ以下の軽病はことごとく治癒していきける。●寿命によって死すべき命も延ばすことができる。●淫欲盛んなものも自ずと欲を離れて正常になり、●短気で怒りっぽい性格、愚痴が多く嫉妬深い性格等も改まって立派な人格者へと向上していく。

このような結果がでている信徒の方がたくさんいます。

どうですか？ともどもに体験してみませんか？

日蓮正宗寺院へ

日蓮正宗には、総本山富士大石寺のほか全国各地や海外各国を含め七百を超える寺院があります。これらの寺院はいずれも日蓮大聖人の仏法をその地域において正しく守り伝え、弘めていく大事な意義をもっています。

日蓮大聖人の仏法を信仰するには、日蓮正宗の寺院に参詣し、正しい教えを聞き取ることがまず第一歩です。

仏教について



お釈迦様は、七十二歳までに「華嚴」「阿含」「方等」「般若」といった教えを説きました。これらは全て、人々を真実の教えに導くための、一時的な仮の教えだったのです。したがって、これらの教えを信仰している既成仏教では功德がない、とお釈迦様自身が言っています。

お釈迦様は、七十二歳までに「華嚴」「阿含」「方等」「般若」といった教えを説きました。これらは全て、人々を真実の教えに導くための、一時的な仮の教えだったのです。したがって、これらの教えを信仰している既成仏教では功德がない、とお釈迦様自身が言っています。

効果はあるの？



では、日蓮正宗の大御本尊を信仰し、南無妙法蓮華経と唱えればどうなるのでしょうか？ 真実絶大な威力を持つ仏様の命と深いお悟りの当体である大御本尊と、私達の生命が感応し、私達の生命に仏界（仏様の命）という最高の生命力が湧き上がってきます。この仏界を元に生活すると、力強い活動力や不思議な智慧の働きを発揮し、人格も磨かれて、自然に人徳が備わ

お釈迦様が亡くなってから二千年以後の末法時代には、日月の光のような偉大な仏様が現われて、さまざまな大迫害にあいながらも、法華経の中に隠されていた妙法を説いて、末法の民衆を幸せへと導いてくださる……。その予言のとおり出現されたのが日蓮大聖人であり、大聖人の教えを正しく今日に伝えているのが、富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

真に幸せになれる宗教は 日蓮正宗の 南無妙法蓮華経 です。

- 病苦、経済苦、家庭不和、対人関係の悩み、人格的欠陥、精神的・性格的な悩み等の、人生の荒波や苦悩を打開していきけるようになるのです。
- 具体的な姿の一例を教典から挙げてみましょう。その結果が大きいようになる。● 社会的信用が得られるようになる。● 所得が増加して衣食住に困らなくなる。● 世間において上長の位を得る。● 常に生き生きとした健康体になっていく。● 生まれ

樋田 昌志

090-3343-9338

toyodada@avis.ne.jp

また寺院は、仏・法・僧の三宝がそなわる信仰の道場であり、参詣する人々に真の成仏（絶対的な幸せ）の道を教え、先祖の追善供養をおこなうなどの役割を担っています。

仏界とは「常（崩されることのない自由自在の生命活動）、楽（生きていくことが体が楽しいという）幸福感）、我（何ものにも紛動されない円満で強靱な主体性）、浄（何ものにも染まらない清浄な生命）」

真実の幸福とは

人は、苦しいことや悲しいこと、また困難なことに出会ったとき、それを解決し克服する方法について思いをめぐらします。しかし、その解決方法を見いだすことは容易なことではありません。

仏法では、生・老・病・死など人間だれもが直面する人生の本質的な苦悩を根本的に解決する道を説き示しています。そして、その本質的な苦悩を解決せずして、真の幸福はありえないと説いています。

真の幸福とは、観念的なものではなく、因果の道理をもととした正しい信仰によって、自己の内面にある健全な生命を確立し、深い智慧と強い心を養うことによっ

てはじめてもたらされるものです。どの様なことにも、けっして揺らぐことのない安穩な境界、それが真実の幸福なのです。

【Q】「神仏を礼拝することが尊いのであるから、何宗でも良いのではないか？」

【A】「宗教に限らず、人間にとって、敬い、信ずるという事は大切な事だと思えます。日常生活においても信頼する心がなかったら、食事も出来ませんし、乗り物はおろか、道を歩く事も、家に住むことさえできないでしょう。」

では反対に何でも無節操に信ずれば良いかというところ、それもいけません。

道に迷ったときは、道を良く知っている人に尋ねれば、間違いない目的地に着く事が出来ます。反対に良く分かっていない人に聞いてそれを無闇に信じたらどうなるでしょう。

目的地に正しく導いてくれるものを信用した時には、所期の目的が達成されて大きな喜びに包まれるわけですが、反対に偽りのものや目的と違ったものを信じたときには、思い通りにならず、不満や、不幸を感じるのです。

質問のように、「神仏を信ずる心が尊い、神仏を礼拝する姿が美しい、だから何宗でも良い」というのは、ブレイキの壊れた車でも、見かけはおかしくないから大丈夫だ、と信じて、調べもしないで乗る事が良い、という事と同じではないでしょうか。また、最近の例では、オームの麻原氏やライフスペースの高橋氏の言う事でも、信ずる姿は尊い、という事と同じです。このような反社会的な宗教なら、良識を持った人なら誰の目にもその正邪は明らかですが、この正邪善悪の立てわけは、それ以外のあらゆる宗教にも応用されるべきものではないでしょうか。世間でも本当の悪人は意外と悪い人には見えないと云う事も、ままあるようです。

生命は周囲の環境に応じて、様々な状態や働きをします。「朱に交われば赤くなる」という言葉も、周囲の縁によって感応する生命の働きを指したものでしょう。

信仰は「信ずること」であり、「礼拝する事」なので、単に交わるとか尊敬する状態より、更に強い影響を受け、それによってもたらされる結果や報いは、人生に大きな影響を与える事になります。

言い換えれば、信仰における礼拝は、その

対象たる本尊に、衆生の生命が強く感化されるのであり、生命と生活全体にこれほど強烈に働きかけ、影響を与えるものはないのです。ですからいかに信ずることが尊いといっても、生命に悪影響を与える低劣な本尊や誤った宗教を信ずるならば、その本尊や教えに感応して、次第にその人は無意識の内に濁った生命となり、不幸な人生を歩む事になるのです。

たとえば「稲荷」と称してキツネを拝んでいると、本尊のキツネの生命にその人の畜生の生命が感応して、その人の性格や行動、更には人相まで似てきます。本来なら過去と将来を考え理性をもって生きるはずの人間が、畜生を拝む事によって、計画性や道徳心が欠落し、人間失格の人生に変わっていくのです。

この原理はあらゆる宗教についても言える事です。先程の例でも教祖の過った考え方に影響を受けて、大量殺人すら平然と犯すようになってしまったり、完全に死んでミイラ化しているにも関わらず「生きている」と言い張ったり。

では、もう少し歴史のある既成宗教はどうなのでしょう。それぞれの宗派の本尊や、教義が本当に不変妥当性があるって、一人の人間から、一国、ひいては全世界を絶対の幸福に導いていける確たる証拠があるのでしょうか。また信仰する側もそのようなた検証をしているのでしょうか。今現在の世間の宗教事情を見ますと、その辺の所が甚だ疑問で、恐ろしくなってきました。

同じ信仰心があっても、真に正しい本尊を信じ、礼拝しなければ本当の幸福にはなれません。

信仰心がある方ならば、一刻も早く、理論的にも正しく、文献的証拠によってもその正しさが証明され、現実に人々を幸福に導く真実の本尊と、真実の教えを解き明かす宗教に帰依すべきでありましょう。真の力ある宗教の功德は、それを実践した人には必ず感得できるものです。」

暁鐘編集室発行

『折伏入門』小川只道御尊師監修

『他の宗教にも利益があるのではないですか？』

▲正しい宗教は、日蓮正宗しかないので、△そうです。

▲しかしですね、私の友人でも、日蓮正宗以外の宗教を信仰していて、病気が治ったと言っています。他の宗教を信仰していても御利益というものがあり、それで幸せになったというのなら、それはそれで良いのではないのでしょうか。

▽低い教えを説く宗教でも、低い教えなりの利益はあるし、また高い教えを説く宗教には、高い教えなりの高度な利益があるわけです。

それはなぜかといいますと、信仰することによって、その信ずる対象がストリートに我々の中に影響してくる、ということ先程お話しましたね。

たとえば、狐や蛇を信仰する宗教がありませんが、狐や蛇などの畜生の類には、人間にはない一種特有な能力があるわけです。畜生の通力といって、たとえば地震がくる前に犬や鳥が騒ぐとか、沈没する船には、予めネズミが一匹もいなくなるとか、いろいろ話をよく聞くでしょう。そのように畜生には、予知能力だとか、人間にはない不可思議な力が具わっているわけです。その狐や蛇などの畜生の類を本尊として崇め信仰すると、自分達の中にも畜生の生命がストリートに影響してくるから、畜生に具わっている能力の一分も自分達の中に具わってくるのです。だから、なくした物が見つかったり、転びそうなどころを転ばないですんだり、といったような利益があるのですよ。

しかし、こうした低い教えなりの小利益に甘んじて信仰を続けていきますと、かえって不幸になってしまいます。

なぜかというところ、「利益があった、すごい」などといって稲荷信仰などに熱心にのめり込んでいく、すると、信ずれば信ずるほど畜生の影響を強く受け、ついには自分の中に畜生の生命が完全に入ってきて、自分の人格が畜生と同化してしまふ。最後には、狐憑きのようになってしまふ場合があるわ

けです。

狐憑きという状態は、もう普通の人間でなくなつて、狂つてしまつた状態ですから、それをもって幸福だなどは、けっしていえません。

昔から、お年寄りの人が「宗教をすることは良いことだ、しかし、やり過ぎると良くない」と言うでしょう。それは、お年寄りには長年の人生の中でいろいろ現象を見たりしているから、宗教を信仰すると不思議な力があるということを知っている、しかし同時に、宗教を信仰したために気が狂ってしまったケースなども現実に見ているから、「やり過ぎると良くない」と言うわけですね。

実際には、やり過ぎたからいけなかったのではなくて、結局、低い教えにはそれなりの低い利益があるけれども、それが真実の人間の幸福になっていないということなのです。

さらにいえば、低い教えを信じて、より高い教え、つまり日蓮正宗の真実の御本尊様を信じないで背いているわけですから、低い利益は得られる反面、最高の仏法に背いたための大罰があるのです。ですから、一時的に少し良くなったように見えても、最高の仏法に背くゆえに、後々まで見ていくと、かえって大きな不幸に陥ってしまうわけです。

日蓮大聖人様は、「邪宗教を信仰して少しばかりの功德があるようにみえても、本当の人生の幸福を勝ちとつていけるような大きな利益は絶対ない。その信仰をして御利益があるようにみえても、ついには安穩な生活は送れなくなる、身を滅ぼす結果になる」と仰せられています。

そのことから考えてみますと、哀れなのは、最初の甘言と小さな利益に目がくらんで邪宗教にのめり込んだ人で、結局、後々まで見ていけば、病気や家庭不和、貧乏など、文字どおり地獄のような生活の中に堕ち込んでいくのです。そして、こわいことに、そういう生活に堕ち込んでいきながら、最初に小さな利益があったからということ、その宗教を信じて疑わないのですね。それが『頭破七分』の前兆であり、要するに、感覚がマヒしてしまつても幸も不幸も分別

できない、そのまま深みにはまれば末路は無間地獄に堕ちていってしまうのです。

よくよく、あなた方の周囲を見廻してみれば、わかると思いますが、家中に神札をベタベタと貼ったり、邪宗の壇家総代などを代々続けてきた、というような家ほど、不慮の災難とか病気とか自殺、身体障害などの、深刻な苦悩に喘いでいるケースが非常に多いのです。それこそが邪宗教のもたらした大罰です。

あなたが先程言われたお友達の姿もよく見てください。小さな利益があったとはいえ、後々まで見ていけば、必ず不幸の中に墜ち込んでいくはずですよ。

そのように、誤った宗教、低い教えを説く宗教というのは、信仰すれば自分の身を滅ぼす、恐るべき害毒があるのです。